

伊丹公論022901 1面 井1井2藤3奥4奥5井6井7井8藤9井

奥克彦メモリアルカップで熱戦を繰り広げる中学生選手たち
川県立伊丹高で



ラグビーW杯日本大会

招致立役者はケンイタ出身

ラグー外交官・奥克彦の遺志を後世に

日本代表が悲願の決勝トーナメントに進出し国中を熱狂の渦に巻き込んだ、昨秋のラグビーワールドカップ(W杯)日本大会。この大会招致の仕掛け人は、外交官としてイラク赴任中に銃弾に倒れた奥克彦という県立伊丹高校出身のラグーマンだった。伊丹では、彼の遺志を伝えラグビーの「相手を思いやる精神」を広める運動が続けられている。

【郷土史研究家 森本 啓二(文中敬称略)】



故・奥克彦(当時45歳) = 元外交官・岡本行夫撮影



奥克彦の親友から県立伊丹高に贈られたジャージ

奥はラグー外交官として知られ「ラグビーW杯日本大会を、国内がラグビー一色に

「ONE TEAM」。その言葉を生み出したのは、国籍の違う精鋭の日本代表チームのリーダーだ。日本国歌「君が代」に出てくる「さざれ石」から学んだというが、これこそ奥が

そのグラウンドで令和元年11月24日、第9回奥克彦メモリアルカップラグビー大会が開催された。阪神間と広島が招待された中学生7チームが、男女一体となって熱戦を展開し、川西チームには「kathiko oku

しかし平成15年(2003)11月、イラクで人道支援の活動中、もう一人の同僚とともに銃

「にわかファン」も急増、今もその余韻が続く。年間の流行語大賞にも選ばれた「ONE TEAM」。その言葉を生み出したのは、国籍の違う精鋭の日本代表チームのリーダーだ。日本国歌「君が代」に出てくる「さざれ石」から学んだというが、これこそ奥が

目指した外交官としての使命ではなかったか。世界がどのように互いの健闘をたたえ、相手を思いやるノースイードの精神で一つに結ばれば、世界は間違いなく「ONE TEAM」になる。ただ、これに逆行する悲報も。昨年末にはアフガニスタンで人道支援活動中の中村哲医師が銃弾に倒れた。

奥の名を冠した大会が伊丹で 県立伊丹高(通称ケンイタ)グラウンドの一角に植えられたアメリカフウの記念樹。背が高く、葉の色が、やや赤毛の奥の髪に似ているから選ばれたという。その傍の記念碑には、こう刻まれている。

昭和33年(1958)1月、宝塚市に生まれた奥は昭和48年にケンイタに入学。前年13連敗したラグビー部に入り、仲間とチームを立て直し、2年生の時、東大阪市花園の全国大会出場を果たした。

奥が外務省入省後留学した場所だった。ラグビー部に入り、日本人初の1軍選手となった。イギリスでは、今も奥の名を冠した大会が行われる。そして、メモリアル大会当日の午前10時には記念碑を囲み関係者による黙祷が捧げられる。その模様は遠くジャカルタや東京の仲間を結んで行われた。

人間への強い愛情は、相手をリスペクトするラグビー精神に通じる。彼はそれを地で歩いていた。カツの「イラク便り」(扶桑社)や、「砂漠の戦争ーイラクを駆け抜けた友、奥克彦へ」(岡本行夫/著)、「日本を想い、イラクを翔けたラグー外交官・奥克彦の生涯」(松瀬学/著)は、ぜひ、ことば蔵で読んでほしい。

郷土研究 伊丹公論

復刊 第26号 通巻45号 年3回発行

発行所 伊丹市立図書館ことば蔵 〒664-0895 伊丹市宮ノ前3-17-14 伊丹市072-784-8170 編集 伊丹公論編集委員会

「Trophy」が贈られ、全員で讃えた。この大会は奥の遺志を伝え、ラグビーの魅力とノースイードの精神を広く知ってもらおうと始まった。子どもたちが懸命にタックル、力走、トライする姿に、未来の奥の姿が見えた。

弾に倒れ還らぬ人となった。惜しまれる45歳の非業の死だった。世界の国々を楕円球でつなぐ

日本とイラクを翔けた外交官 「奥の話なら何時間でもできる」「いい男だった」。仲間は試合の合間に奥の話をよくさん聞かせてくれた。また、人道支援のイラクで、日本の医師団が、乳幼児が置かれた環境のひどさに「おむつがあればなあ」と呟いた時、カツは隣国イランの日本人会に電話し、すぐに5万人分を調達した。NHK朝の連続テレビ小説「おしん」の放映も、イラクの放送局にかけ合って実現させた。

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。